

呉海兵団軍楽隊が広島音楽普及に果たした役割

—先行研究の概観と今後の課題—

竹下 可奈子

0. はじめに

1890/M23年、広島県呉市に呉鎮守府が開庁され、それに伴い呉海兵団に軍楽隊が配置された。それ以前は寂寥とした一漁村であった呉市は、鎮守府開庁によって急激に都市化、近代化が推し進められたが、その影響の中に呉海兵団軍楽隊によるものが多分にあったことは想像に難くない。横須賀海兵団にて高い水準の音楽教育を受け、呉海兵団に配置された軍楽隊員は、行事演奏や公開演奏会での演奏等を通して、呉市民や、広島県民全体へ西洋音楽の提供を行った。それら呉海兵団軍楽隊による演奏活動の足跡を追うことは、広島の音楽史を明らかにするうえで、非常に重要な要素であると言える。

本稿では、呉海兵団軍楽隊についての先行研究について検討したうえで、現時点で明らかとなっている呉海兵団軍楽隊の活動内容についてまとめ、今後さらにどのような視点での調査が必要となってくるかについて、課題を明らかにしたいと考える。

1. 先行研究検討と今後の課題

1-1. 先行研究検討

これまで海軍軍楽隊については、多くの研究がなされてきた。薩摩藩の鼓笛隊に始まる軍楽隊が、日本において西洋音楽を初めて組織的、職業的に学んだ機関であったこともあり、日本の西洋音楽受容に与えた影響についてはとくに注目されてきた。ここでその一端について言及しておく、まず日本近代洋楽史の中での海軍軍楽隊について論じたものとしては、三浦俊三郎『本邦洋楽変遷史』(1931)や堀内敬三『音楽五十年史』(1942)、大森盛太郎『日本の洋楽』1・2 (1986・1987)が挙げられる。これらは軍楽隊関係者からの聞き書きなど、貴重な資料を含んだ研究となっており、海軍軍楽隊が日本での洋楽普及に果たした役割を知る上で欠かせない文献である。また、塚原庸子『十九世紀の日本における西洋音楽の受容』(1993)では、明治初期における西洋音楽学習の主要な担い手のひとつとして海軍軍楽隊が取り上げられ、幕末期から1887/M20年に至るまでの、海軍軍楽隊による西洋音楽の伝習課程が明らかにされている。

海軍軍楽隊そのものについて書かれたものとしては、楽水会編『海軍軍楽隊』(1984)や針尾玄三編『海軍軍楽隊：花も嵐も...』(2000)を挙げるができる。これらは両方とも旧隊員の証言が多分に含まれており、当時の軍楽隊の状況を窺い知るには重要な文献である。ただし、典拠の不明な部分も多く、参照する際には注意が必要と考えられる。

また、軍楽隊の演奏内容を知る上で非常に重要な文献として、谷村政次郎『日比谷公園音楽堂のプログラム』(2010)が近年刊行された。これは1905/M38年から1943/S18年までの間、日比谷公園音楽堂で開催された東京市主催の公演演奏における、陸軍軍楽隊、海軍軍楽隊および外国軍楽隊等の演奏曲目が、主として収録されている。軍楽隊のレパートリーを知るうえでは非常に貴重な資料であると言える。

以上に挙げた文献は、海軍軍楽隊研究の一部であり、これ以外にも海軍軍楽隊についての研究は多くなされてきた。しかし、軍楽隊員の教育はすべて横須賀および東京で行われていたことなどもあり、その研究は東京周辺が中心となっている。海軍軍楽隊全体がどのように発展したか、また軍楽隊員がどのような教育を受け、各地に派遣されるに至ったかについては明らかになっているものの、地方に

における軍楽隊の活動については、ほとんど取り扱われていない。実際に、これまでに呉海兵団軍楽隊を主眼点とした研究を行っているのは、道下京子、桑原功一の2名だけであり、この点からも呉海兵団軍楽隊についての研究の立ち遅れが分かる。以下、両2名の研究内容について、検討を行う。

まず道下は、呉海兵団軍楽隊の活動の中でも、とくに教育活動と連携したものに注目し、研究を行っている。道下が大きく取り上げているのは、私立淡水小学校での行事演奏と、呉の諸学校での出向演奏の2点である。まず1点目、私立淡水小学校についてであるが、私立淡水小学校は海軍関係者の子弟を教育するために、1890/M23年8月に呉鎮守府の開庁と共に開校された学校である。そのため、行事の際には呉海兵団軍楽隊が演奏を行っていた。また、当時としては最新の教育を行っており、広島県で最初にオルガンや蓄音機が設置された。道下は上記の事実を根拠に、私立淡水小学校での呉海兵団軍楽隊の演奏や音楽教育が、呉のその他の教育機関に大きな影響を与えたのだらうと推察している(2002: 12)。

次に2点目、諸学校での出向演奏については、1926/T15年11月に行われた呉市立高等女学校の演奏会において呉海兵団軍楽隊が出張演奏し、管弦楽編成で合唱の伴奏を行っていることを例に挙げ、呉海兵団軍楽隊が呉の教育機関における音楽活動を充実したものにしていた点を指摘している(2002: 15)

道下は結論として、教育活動と連携した呉海兵団軍楽隊の音楽活動が、呉市全体への洋楽普及につながったとしている。呉海兵団軍楽隊は軍楽組織内での活動を超えて、市民のための音楽提供を行っており、その影響は大きいとまとめている(2002: 15)。

このように、教育現場と連携した軍楽隊の音楽活動に注目している点は非常に興味深い。しかし、道下自身も述べているように、そもそも教育現場における音楽活動の記録がほとんど現存していないという点が、大きな課題である(2002: 16-17)。論文の中でも、呉海兵団軍楽隊が教育機関で演奏した記録は3点しか明示されておらず、その影響について考察するには十分とは言い難い。より多くの1次資料にあたることにより、さらなる情報を得ることが必要であると考ええる。

また、発表された研究報告では、呉市内の学校における軍楽隊の活動についての考察にとどまっておらず、広島県全体へまでは及んでいない。呉市民だけではなく、県内全体ではどのような活動を行っていたのかについて、さらなる調査を行うことが必要であると考ええる。

続いて、桑原による研究であるが、桑原は呉海兵団軍楽隊の中でも、1920/T9年から1928/S3年まで軍楽長を務めた、河合太郎に焦点をあてた研究を行っている。桑原は、軍楽長・河合太郎が、呉の音楽愛好家から送られた手紙をきっかけに公開演奏会の曲目に日本曲を交えて演奏するようになった点を指摘し、呉海兵団軍楽隊が呉市民と相互関係を築き始めた兆候としている(2008, 第44巻: 53)。また、作曲家・坊田壽真との交流にも注目し、呉の音楽家ネットワークからの影響も多分に受けていたと考察している(2008, 第2号および2008, 第44巻)。

結論として桑原は、軍楽隊と呉市民は、大正から昭和初期にかけて、啓蒙的・指導的關係から相互関係へ変化した、としている(2008, 第44巻: 53)。その中で、呉市民に「天皇—国家—呉市・海軍」との一体感を醸成させることに成功し、呉鎮守府が目指してきた「官民融和」の実現がなされたという(2008, 第44巻: 56)。

河合太郎が軍楽長に就任したのは、二河公園音楽堂での公開演奏会が開始された3年後のことで、その就任期間は、呉海兵団軍楽隊で管弦楽が編成されるなど、軍楽隊の演奏活動、市民交流がもっとも活発化した時代であった。そのため、河合太郎の主導した演奏活動に焦点を当てた研究は、呉海兵団軍楽隊の行った洋楽普及について考察するうえで、非常に重要なものであると言える。また、呉市民との相互関係に注目した点も、非常に興味深い。

ただ、道下の研究と同様に、その考察は呉市民に与えた影響にとどまっている。また、大正末期から昭和初期の8年間という、限定された時代についての考察となっている点も指摘できる。

以上の先行研究を踏まえ、今後どのような視点での調査が必要となってくるのかについて、検討を行う。

1-2. 課題

これまで呉海兵団軍楽隊について行われてきた研究を概観すると、以下2点の課題を指摘することができる。

まず1点目は、その演奏活動全体を把握したものがないという点である。呉海兵団軍楽隊は様々な行事演奏や公開演奏会を発足時から絶えず行ってきた。しかし、その全貌を詳細に編纂したものは、現在のところ存在しない。呉海兵団軍楽隊が、いつ、どこで、どのような演奏活動を行ったのか、その記録の編纂は、軍楽隊による洋楽普及を追ううえで、非常に重要な資料となるものと考えられる。

そして2点目は、広島県全体へ与えた影響についての考察がなされていないという点である。軍楽隊の活動が呉鎮守府周辺を中心としたものであったことを踏まえると、まず呉市にどのような影響を与えたのかについての研究がなされるのは至極当然のことであるが、そこにとどまらず、県全体への影響を考察することが非常に重要ではないだろうか。戦前は現在よりも、広島市と呉市の時間距離は遠く、両者の文化的交流は容易ではなかったと考えられる。そのため、広島市に対する呉海兵団軍楽隊の影響は、呉市に比べさほど大きなものでなかった可能性も指摘できる。そのような擬点を明らかにするためにも、広島市における一般市民や教育関係者による音楽活動と、呉海兵団軍楽隊の音楽活動を照らし合わせ、考察を行う作業が必要であると考えられる。

以上を踏まえたうえで、まずは呉海兵団軍楽隊の演奏活動全体について、各種資料から明らかにしていくことが必要と考える。そのうえで、呉市および広島県全体の音楽活動の動向と照らし合わせ、呉海兵団軍楽隊による影響の全貌を明らかにしていきたい。

2. 呉海兵団軍楽隊

本項では、現時点で明らかとなっている呉海兵団軍楽隊の沿革および活動内容について提示する。

2-1. 呉海兵団軍楽隊について

1969/M2年に日本で初めて吹奏楽の伝習を開始した薩摩藩軍楽伝習隊を母体として、1971/M4年に海軍軍楽隊が発足された。国家行事での演奏等を通して業績をあげる一方、1878/M11年には軍楽隊員の一般公募も開始し、確実にその基礎を固めていった。1889/M22年には数々の諸条例、規則が制定され、海軍軍楽隊の制度が確立された。呉海兵団軍楽隊が配置されたのは、その翌年1890/M23年のことで、この時同時に佐世保海兵団軍楽隊も配置されている。

配置当初の呉海兵団軍楽隊は、軍楽師1名、一等軍楽手6名、二等軍楽手6名、三等軍楽手5名、一等軍楽生4名、二等軍楽生5名の計27名編成であった(海軍省大臣官房編1972:207)。初代軍楽隊長は花房寛一説が一般的であるが、田中穂積としている文献も存在する(大森1986:61)。軍楽隊員の教育はすべて横須賀海兵団で行われ、そこで1年間軍人としての基礎教育および、軍楽隊員としての一通りの教育を受け、各実施部隊に配属された。また、配属後も、将来軍楽指揮者として適当と認められた者は、選抜により特修科軍楽術練習生を命じられ、東京派遣所に入所、東京音楽学校へ通学した。期間は2年で、習得科目は弦楽、唱歌、和声学、外国語などであった(「海軍」編集委員会1981:277)。

呉海兵団軍楽隊配置の4年後、日清戦争が勃発し、大本営が広島におかれた。大本営には呉海兵団軍楽隊および近衛師団軍楽隊の2隊が差遣され、偶数日には近衛師団軍楽隊、奇数日には呉海兵団軍楽隊、というように、毎日交互に大本営にて御前演奏を行ったという(大森1986:61)。

1917/T6年には呉市二河公園音楽堂が開堂し、音楽堂開きには呉海兵団軍楽隊が演奏を行っている(呉市史編纂室編1976,第4巻:563)。それ以降呉海兵団軍楽隊は二河公園音楽堂で市民のための定期演奏会を行うようになり、それまでは行事演奏が主であった呉海兵団軍楽隊の演奏活動範囲はさらに広がった。

昭和に入り「海軍軍楽隊配置表」が制定され、呉海兵団軍楽隊は「乙隊」に規定された。それに対し、横須賀海兵団軍楽隊、海軍軍楽隊東京派遣所軍楽隊の二隊は「甲隊」とされ、海軍軍楽隊の中核機関として格付けされた。「乙隊」は他に佐世保、舞鶴各海兵団軍楽隊等が該当した。また、それ以外

に儀礼用軍楽隊が「丙隊」とされた（楽水会編 1984-5: 120）。

昭和初期には、呉市民によって結成されたロンバルディア管弦楽団や呉海軍工廠ブラスバンドの指導を行うなど、呉海兵団軍楽隊はさらに幅広く呉市民への音楽普及に貢献するようになった（呉市史編纂室編 1987, 第5巻: 678-679）。

海軍軍楽隊は1908/M41年から弦楽器の研究を開始し、1911/M44年には管弦楽編成軍楽隊海外派遣、日比谷公園での管弦楽演奏公開を行うなどしていたが、1925/T14年には、呉海兵団軍楽隊に管弦楽隊が配置されることとなった。それは、東京派遣所軍楽隊を除いては、海軍軍楽隊唯一の管弦楽編成隊であり、呉海兵団軍楽隊の大きな特徴であると言える。また、呉海兵団軍楽隊の演奏活動は広島県のみにとどまらず、中国、四国地方にも頻繁に派遣されていた（針尾 2000: 64）。

このように、60年近くにわたり活動を続けてきた呉海兵団軍楽隊であるが、1945/S20年、太平洋戦争の終結に伴い解体され、その歴史に幕が下りた。

2-2. 演奏の記録

調査途中ではあるものの、現在の時点で明らかとなっている呉海兵団軍楽隊の演奏活動記録について紹介する。表1は、各種新聞等の複数の資料から、呉海兵団軍楽隊の演奏の記録を取り上げ、表にしたものである。完全ではないものの、いくつかの傾向を指摘することができる。

表1 呉海兵団軍楽隊 演奏記録

| 西暦 | 和暦 | 月 | 日 | 行事演奏 | 演奏会 | 備考 |
|------|-----|----|----|------------------|-----|--|
| 1890 | M23 | 03 | 27 | | | 「海軍定員表」改正で呉海兵団に軍楽隊を配置 |
| | | 04 | 19 | 呉鎮守府開庁式 | | |
| 1891 | M24 | 06 | 15 | 呉港道路竣工式 | | |
| | | 08 | 31 | 淡水小学校創立記念式典 | | |
| 1893 | M26 | 01 | 23 | 千島号遭難追弔大法会 | | |
| 1894 | M27 | 03 | 09 | 第2回観兵式 | | 明治天皇銀婚式を祝して |
| | | 07 | | | | 宮原小学校、呉高等小学校にそれぞれ風琴を1つずつ買い入れ、唱歌の授業用 |
| | | 09 | 13 | 日清戦争大本営にて御奉仕 | | |
| 1895 | M28 | 11 | 17 | 呉海軍歓迎会 | | 「広島からの五百余名をはじめとし近在各村より数千の参観者あり。【中略】將に、山海を動かす壯觀雄景にして、呉港はじまつての盛事」(呉新興日報社編 1943: 211-212) 日本得勝行進曲、君が代、歡喜大序の曲、越後獅子琴曲、凱旋行進曲、御國の櫻、箏曲軍人の楽しみ、春雨俗曲、愛國心早行進曲 |
| | | 12 | 01 | 旧芸藩出身軍人慰労会 | | 広島市泉邸において |
| | | | 18 | 御眞影奉戴式 | | |
| 1896 | M29 | 07 | 06 | 戦利品献納式 | | |
| 1897 | M30 | 10 | 27 | 軍艦宮古進水式および創兵器発射式 | | |

| | | | | | | |
|------|-----|----|----|-------------|--------|---|
| 1898 | M31 | 05 | 06 | 海軍招魂祭 | | 「呉港市民の参拜者一人もなきに、當局では町村役場の無關心に歎息を洩らす」(呉新興日報社編 1943: 248) |
| 1899 | M32 | | | | | 呉港周辺と、和庄大通り周辺の地域格差広がる まるで東京のように発展した呉港と、未だ藁屋根の残る和庄大通り(呉新興日報社編 1943: 260-261) |
| 1902 | M35 | 04 | 03 | 日英同盟祝賀会 | | 呉港にて謡, 能の流行 |
| | | 10 | 01 | | | 市制施行し呉市に |
| 1903 | M36 | 03 | 14 | 宇治・蒼龍進水式 | | 「開宴中絶えず奏樂」(呉新興日報社編 1943: 455) |
| | | 12 | 27 | 呉官線鉄道開通式 | | |
| 1904 | M37 | 05 | 12 | 陸海戦捷祝賀会 | | |
| | | 09 | 26 | 海軍病院慰安園遊会 | | |
| | | | | | | 「この頃漸く華美に流れて普通人の葬儀に海軍公葬に模倣して市中葬祭に音楽隊を用ひるものも間々あるに至る」(呉新興日報社編 1943: 418) 「最近ヴァイオリン, 風琴の教授所あり」(呉新興日報社編 1943: 421) |
| 1905 | M38 | 01 | 05 | 日露戦争旅順陥落祝賀会 | | 「この日ばかりは市民数万に出入許可證を興へられ、四ッ道路あたりから構内へかけての雑踏素晴らし」(呉新興日報社編 1943: 501) |
| | | 04 | 09 | 海軍病院慰安園遊会 | | |
| | | 07 | | 海軍病院慰安小園遊会 | | 「軍人の勇氣」「梅の春」「勅諭五カ條」「軍用カバン」「舌出し三番叟」「軍旗」 |
| | | 10 | 22 | 予後備下士兵解隊式 | | |
| | | 11 | 03 | 天長節祝賀 | | |
| | | | 21 | 所属艦凱旋歓迎会 | | |
| | | 12 | 02 | 英国支那艦隊来訪歓迎 | | |
| | | | 12 | 軍艦筑波進水式 | | |
| | | | 26 | 軍艦筑波進水式 | | 12日に進水式を挙げるも、その後故障のため26日に再度挙げる |
| | | 12 | 15 | 高砂殉難者海軍合同葬儀 | | |
| | | | 27 | 工廠創立10周年祝賀 | | |
| 1906 | M39 | 02 | 06 | 山内工廠長ら送迎式 | | |
| | | | 16 | | 干城会音楽会 | |
| | | | 17 | | | 「會財集聚の趣旨により呉座に於て音楽會を開く」(呉新興日報社編 1943: 566) |

| | | | | | | |
|------|-----|----|----------------------------|---------------------------|----------------------|---|
| | | 03 | 06 | 英コンノート殿下来訪 | | |
| | | 04 | 09 | 軍艦生駒進水式 | | |
| 1907 | M40 | 01 | 01 | 元旦の賀式 | | |
| | | 04 | 14 | 軍艦安芸進水式 | | |
| | | 10 | | | | 呉海兵団軍楽練習所の建物竣工 (建坪 20 坪) |
| | | 11 | 21 | 軍艦伊吹進水式 | | |
| 1911 | M43 | 03 | 25 | 載瀧殿下御来呉 | | |
| | | 04 | 20 | 第六潜水艇殉難葬儀 | | |
| | | 09 | 11 | 朝鮮合邦祝賀 | | |
| 1912 | M44 | 03 | 29 | 軍艦攝津進水式 | | |
| | | 05 | 27 | 海軍記念日 | | |
| | | 09 | | | 練習公開 | 「龜山神社境内で練習中一般へも公開。次いで五番町小學校での公開もあり。翌年も再度公開。樂長野坂榮太郎指揮。」(呉新興日報社編 1943: 757) |
| | | 10 | 01 | | 市民慰安のための公開演奏 | |
| 1915 | T04 | 春 | | 広島市で産物共進会開催, 呉海兵団軍楽隊が出張演奏 | | 「演奏者は小學校兒童(広島市内及其附近), 師範學校生徒(男女), 女子中等學校生徒(広島市内及び交通便利なる地方), 小學校教職員團(有志), 縣内中等學校在職者音樂專門家, 海軍々樂隊なりと」(中国新聞 1915/T4 年 1 月 12 日) |
| 1917 | T06 | 11 | 10 | | 二河公園音樂堂開き | 二河公園音樂堂建設 二河公園音樂堂での演奏会開始 |
| 1920 | T09 | | | | | 河合太郎, 軍楽長に就任 |
| 1921 | T10 | | | | | 「官民融和」を目的とした演奏会が夏の毎週土曜日に開催されるようになる |
| 1925 | T14 | 04 | | | | 呉海兵団軍楽隊に管弦楽隊配置 |
| | | 05 | 27 | | 公開演奏会 | |
| | | 08 | 29 | | 公開演奏会 | |
| | | 09 | 12 | | 公開演奏会 | 二河公園音樂堂にて |
| | | | 19 | | 公開演奏会(管弦楽編成にて) | |
| 11 | 28 | | 呉市立高等女學校の演奏会に賛助出演(管弦楽編成にて) | | | |
| 1927 | S02 | | | | ベートーヴェン死後 100 年記念演奏会 | |
| | | 07 | 29 | | 公開演奏会 | 二河尋常小學校校庭にて |
| 1928 | S03 | 02 | | | | 河合太郎, 軍楽長を退任 |
| | | 09 | 29 | | 秩父宮殿下御結婚奉祝演奏会 | |
| | | 12 | | | | 坂西久治, 軍楽長に就任 |

| | | | | | | |
|------|-----|----|----|--------|--------------------------|---|
| 1930 | S05 | 12 | 29 | | | 呉海兵団軍楽隊楽堂改築落成式挙 行 |
| 1934 | S09 | 02 | 11 | | 小学校、高等女学校の連合音楽 会に賛助出演 | |
| 1942 | S17 | | | 航空機献納式 | 式後演奏会 | 地元関係者に慰労、感謝の意を込め た演奏会(針尾 2000: 64) |
| 1945 | S20 | 08 | 15 | | | 太平洋戦争終結。海軍軍楽隊解隊。 終戦時の呉海兵団軍楽隊軍楽長は 片岡愨長 |

まず、1898/M31 年を見ると、5 月に行われた海軍招魂祭に呉市民の参拝者がなく、その無関心さが嘆かれていることが分かる。また、翌 1899/M32 年には呉港周辺と、和庄大通り周辺の地域格差が話題となっている。これらの点からは、鎮守府開庁にともない急激に推し進められた都市化に、呉市民が追い付いていない様子が伺われる。しかし、1904/M37 年には、葬儀の際、海軍公葬にならって音楽隊を用いるものが出るなど、呉海兵団軍楽隊の影響が浸透しつつある傾向がみられる。この「音楽隊」がどういった形態のものであったのかは、定かではない。鎮守府からの許可が下りれば軍楽隊の借用が可能であったため、呉海兵団軍楽隊のことであった可能性もある。市民が呉海兵団軍楽隊の借用を行うようになっていたとすれば、軍楽隊と市民との重要な接点のひとつと言えるため、この点についてはさらなる詳しい調査が必要と感じている。

また、同じ 1904/M37 年の備考欄に、呉市において「最近ヴァイオリン、風琴の教授所あり」との記述があるが、これは軍楽隊とは別のルートからの洋楽導入であると考えられる。なぜならば、呉海兵団軍楽隊に管弦楽隊が配置されたのは 1925/T14 年のことであり、それ以前には呉海兵団軍楽隊には弦楽器が存在していなかったからである。呉には鎮守府開庁にともなう東京からの移住者が数多く存在したため、彼らによるものか、もしくは広島市など、近隣の都市からの流入も考えられる。いずれにせよ、単純に軍楽隊が呉市の洋楽導入を牽引していたわけではない点は興味深い。

また、広島市とのかかわりが伺えるものとしては、1895/M28 年の呉海軍歓迎会に広島から 500 余名の参観者があったとの記述があるのに加え、1915/T4 年には広島市で開催された産物共進会にて呉海兵団軍楽隊が出張演奏を行った、とある。この共進会では、広島市内の生徒および教職員も演奏を行っており、そこで何らかの交流があったのではないかと考えられる。

現在は参照している資料も少なく、考察を行うには十分でないが、今後さらに多くの資料に目を通すことによって、演奏記録の充実を図りたいと考えている。具体的には、『藝備日々新聞』、『呉日日新聞』、『呉新聞』、『呉鎮守府沿革誌』、『大呉市民史』、『中国新聞』といった 1 次資料をあたることによって、ある程度の演奏活動の記録を追うことができるのではないかと考えている。

それと並行して、演奏内容についても出来る限り明らかにしたい。こちらについては、上記の資料のほかに、現存する演奏会リーフを可能な限り調査、入手したいと考えている。ただ、現在のところ、呉海兵団軍楽隊の行った演奏内容を網羅できる資料は探し出せておらず、さらなる調査の必要性を痛感している。

3. おわりに

以上のように、呉海兵団軍楽隊の演奏記録を追ったうえで、「広島音楽史」プロジェクトでの広島高等師範学校やミッション・スクール、ラジオ放送などの音楽活動と照らし合わせ、呉海兵団軍楽隊の果たした洋楽普及の役割について明らかにしていきたい。当時日本屈指の技術を誇った軍楽隊の演奏活動および地域住民とのかかわりがどのようなものであったかを明らかにすることが、広島の洋楽普及の過程を明らかにすることにつながると考えている。

引用文献および主要参考文献

- 秋山龍英編著 1966 『日本の洋楽百年史』 東京：第一法規出版
- 大阪音楽大学音楽文化研究所編 1970 『大阪音楽文化史資料（昭和編）』 大阪：大阪音楽大学
- 1968 『大阪音楽文化史資料（明治大正編）』 大阪：大阪音楽大学
- 大森盛太郎 1986 『日本の洋楽』 1・2 新門出版社
- 海軍省大臣官房編 1972 『海軍制度沿革』 第10巻 東京：原書房
- 「海軍」編集委員会編 1981 『海軍』 第12巻 東京：誠文図書
- 楽水会編 1984-5 『海軍軍楽隊：日本洋楽史の原点』 東京：国書刊行会
- 久保田利数 1971 「呉海軍軍楽隊」 1-50 『呉日日新聞』
- 呉市史編纂室編 1956- 『呉市史』 第4-6巻
- 呉新興日報社編 1943 『大呉市民史』 明治篇
- 桑原功一 2008 「昭和初期，呉における『新日本音楽』運動の展開—元呉海兵団付軍楽長 河合太郎の『新日本音楽』に関する提唱を通してみる—」 『呉市海事歴史科学館〈大和ミュージアム〉研究紀要』 第2号 3-23.
- 2008 「昭和初期における海軍軍楽隊と地域—呉海兵団付軍楽隊と『音楽都市』呉を事例に（特集 戦争と音楽）」 『軍事史学』 第44巻 第2号 43-61.
- 園部三郎 1950 『音楽五十年』 東京：時事通信社
- 谷村政次郎 2010 『日比谷公園音楽堂のプログラム—日本吹奏楽史に輝く軍楽隊の記録—』 東京：つくばね舎
- 塚原康子 1993 『十九世紀の日本における西洋音楽の受容』 東京：多賀出版株式会社
- 中村洪介 2003 『近代日本洋楽史序説』 東京：東京書籍
- 中村理平 1993 『洋楽導入者の軌跡—日本近代洋楽史序説』 東京：刀水書房
- 日本近代洋楽史研究会編著 1995 『明治期 日本人と音楽』 東京：大空社
- 針尾玄三編，常数英男監 2000 『海軍軍楽隊：花も嵐も...』 東京：近代消防社
- 堀内敬三 1942 『音楽五十年史』 東京：鱒書房
- 三浦俊三郎 1931 『本邦洋楽編纂史』 東京：日東書院
- 道下京子 2001 「日本における洋楽導入をめぐる」 『音楽の世界』 第40巻 第5号 4-11.
- 2001 「日本における洋楽導入をめぐる(2) 大正6年～昭和2年における広島県呉市をモデルケースとして」 『音楽の世界』 第40巻 第8号 8-12.
- 2002 「呉海軍軍楽隊が学校教育に及ぼした影響」 『音楽の世界』 第41巻 第4号 11-18.

竹下 可奈子（たけした かなこ：広島大学大学院教育学研究科博士課程後期所属，d093167@hiroshima-u.ac.jp）

広島洋楽普及におけるミッション・スクール、及び母体教会の役割

—戦前の「広島女学院」と「広島流川教会」を中心として—

光平 有希

序

近代における日本の洋楽普及を検討する際、西洋音楽を重視していた宣教師や彼らが創設したミッション・スクールにおける活動がもたらした影響は甚大だと考えられる。従来の研究では、主に明治からキリスト教プロテスタント諸派の宣教師たちが設立した女学校について考察されることが多く、これらの研究では、ミッション・スクールが宗教教育の手段として西洋音楽を重視し、英語教育と並び、音楽活動、及び音楽教育を熱心に行っていた様子が記されている。しかしこれまで、同じくプロテスタント系の女学校として始まった「広島女学院」や、プロテスタント系女学校ではないものの、カトリック系のミッション・スクールとして広島の地で洋楽普及に大きな影響を与えてきた「エリザベト音楽大学」が果たした役割に焦点をあてて考察されることはあまりなかった。

そこで、本発表ではこの2校のうち、戦前における洋楽普及に大きな影響を与えた「広島女学院」に絞り、「広島女学院」と創立者が同一で、「広島女学院」の母体教会である「広島流川教会」との関連も踏まえつつ、1)「広島女学院」と「広島流川教会」の変遷と概要、2)「広島女学院」における音楽教育、3)「広島女学院」と「広島流川教会」における音楽活動、4)今後の課題といった流れで、広島の洋楽普及に、これらのミッション・スクールと母体教会がいかに貢献してきたのかについて紹介した¹。

1. 「広島女学院」と「広島流川教会」の変遷と概要

まず、「広島女学院」は、砂本貞吉によって明治時代に創設されたアメリカ南メソジスト監督教会系の学校で、1887/M20年の開校以来、「廣島英和女學校」、「廣島女學校」、「広島女学院（廣島女學院）」と名称を変え、現在に至っている。「広島女学院」では、「廣島英和女學校」の初期段階から教科に音楽が含まれ、「廣島女學校」では音楽撰科を置かれて学内外で演奏会が開催されるほか、管弦楽団も組織された。また、戦後間もなくより現在まで続いている《メサイヤ》演奏会をはじめ、多彩な音楽活動は長きに亘って続いている。

他方、「広島流川教会」は1887/M20年に、「広島女学院」と同じく砂本貞吉が中心となりアメリカ人宣教師 J.W.ランバスの協力を得て「廣島美以教会」として創設され、その後「日本メソヂスト 廣島中央教会」、「日本基督教団 広島流川教会（廣島流川教会）」と改称した。その「広島流川教会」は、明治期に導入された洋楽器で演奏会を開くほか、「FK 演奏会」や、戦後間もない頃より盛んに行われた音楽礼拝、独自に教会で「クリスマス音楽礼拝《メサイヤ》」を継続して行うなど、今日に至るまで広島復興に寄り添った音楽活動に従事している。また、戦後の「広島流川教会」における音楽活動では、当時の主任牧師で会った谷本清氏と、「広島流川教会」の教会員であり、廣島高等師範

¹ なお、本研究における戦前とは、「真珠湾攻撃」が行われる1941/S16年12月8日より前を指す。また、「広島女学院」及び「広島流川教会」は戦前・戦後で字体が異なるため、以下、戦前のことについて考察する際には旧字体を、戦後も含め総称を示す時には新字体で表記することとした。

学校、エリザベト音楽大学、比治山女子短期大学で教鞭をとっていた太田司朗氏が大きな役割を果たしていると考えられるため、現在、手記などの一次資料にあたって検討中である。

2. 「広島女学院」における音楽教育

続いて「広島女学院」における、戦前の音楽教育について検討してみたい。以下にカリキュラムの変遷を抜粋したものを記す。なお、カリキュラムの変遷過程については新字体を用いて表記する。

[広島英和女学校] ※創立以来数年間の教育制度は、現存していない。

- | |
|---|
| <p>① 1889/M22年9月改正 普通科4年 — 本科2年 (別に専修科) ・6年制で尋常小学校(4年制)卒業者が普通科の入学資格をもつ。 ・専修科は修業年限が定められておらず、国語、漢文、英語、数学、音楽の5科目を任意で学習する。</p> <p>② 1890/M23年10月改正 予備科2年 — 普通科4年 — 高等普通科2年 (別に専修科) ・8年制で尋常小学校卒業者が、予備科に入学する資格をもつ。 ・専修科は、英語、音楽、手芸、女礼の4科目に変更。</p> <p>③ 1893/M26年9月改正 予備科3年 — 本科3年 — 高等普通科2年 (別に専修科) ・8年制で尋常小学校卒業者が予備科に入学する資格を、高等小学校卒業者が本科の入学資格をもつ。 ・専修科の女礼を家政と改め、1894/M27年には専修科の学科目中、家政を除くとあり、学習できる科目は、英語、音楽、手芸の3科目となる。</p> |
|---|

●3度の改正を経て、音楽は最初期からいずれの改正時にも含まれる。

[広島女学校]

- | |
|---|
| <p>① 1896/M29年7月改正 本科5年 — 高等科(教育科[普通教育科・保母師範科]・文科・理科に分ける)2年・技芸専修科3年 ・本科と技芸専修科の第1学年は尋常小学校卒業者が、高等科には年齢17歳以上の本科又は高等女学校卒業者が入学の資格をもつ。 ・専修過程を独立させ、裁縫専修科を設置(技芸専修科)。 ・本科、高等科、技芸専修科とは別に、志願者に対し、英語撰科と音楽撰科(ピアノ・オルガン・ヴァイオリン)を設ける(この撰科は、別途学費納入が必要)。</p> <p>② 1916/T5年改正 本科5年 — 師範科2年・実科3年 ・高等科を廃止して師範科を設置。 ・技芸専修科を実科と改称し、本科と師範科とは別に英語撰科と音楽撰科あり。</p> <p>③ 1920/T9年改正 本科5年 — 師範科2年・実科3年・専攻科(家事科・英文科)3年 ・新たに専攻科を設け、これまで撰科だった英語をこの中に含め、音楽撰科のみ残る。</p> |
|---|

④ 1922/T11年1月23日改正

高等女学部 3年 — 専門部 3年 (1925/T14年にカレッジと改称)

・音楽撰科のみ残る。

●本科、高等科、専修科のいずれの必修科目にも音楽は含まれていた他、撰科として音楽が設けられた。

●この音楽撰科では、ピアノ・オルガン・ヴァイオリンから楽器を選択することができた。

[広島女学院]

① 1928/S3年改正

高等女学部 — 専門学校 (英文予科 [1年]・英文科 [3年]・家事科 [3年])

・専門学校ができ、音楽撰科はなくなったが代わりに「音楽科」(後の音楽部)が誕生した。

② 1935/S10年12月13日改正

高等女学部 — 専門学校 (英文予科 [1年]・家庭科予備科 [1年]・英文科 [3年]・家事科 [3年])

●音楽は専門学校の一学科ではなく、専門学校・女学校・小学部の希望者からなる「音楽科」ができた。

上記の表を踏まえて、広島女学院における音楽教育の変遷を概観してみたい。まず、「広島英和女学校」時代には、3度の改正を経て専修科で学べる科目が徐々に減る中で、音楽は最初期からいずれの改正時にも含まれていた。続く「広島女学校」では、本科、高等科、専修科のいずれの必修科目にも音楽が含まれていたほか、撰科として音楽が設けられたことは特筆に値すると思われる。なお、この音楽撰科では、ピアノ・オルガン・ヴァイオリンの3種類から習いたい楽器を選択することができた。最後に、戦前の「広島女学院」では専門学校が作られ、残念ながら音楽はその一学科として含まれることはなかったものの専門学校、女学校、小学部の希望者からなる「音楽科」(後の「音楽部」)が設立された。このように、「広島女学院」では様々なカリキュラムの変遷を経る中で、一貫して音楽教育を重視していたことが垣間見られよう。

3. 「広島女学院」と「広島流川教会」における音楽活動

3-1 「広島女学院」における音楽活動

続いて、「広島女学院」における音楽活動にも目を向けてみたい。先行研究によると「広島女学院」の音楽活動については、音楽雑誌である『音楽界』で複数回にわたって取り上げられているという²。また、筆者が当時の地方新聞記事を調査した結果、『芸備日日新聞』に最も多く「広島女学院」の音楽活動に関連のある記事が掲載されていたため、以下、現段階までに分かったものを提示する。

² 坂本麻実子 1998 「明治末期の地方ピアノ界とプロテスタント系女学校——仙台と広島事例から——」『桐朋学園大学研究紀要』第24集：27-44.

● 『音楽界』

- 第2巻第1号 (1908/M41年11月29日に行われた「広島女学校音楽会」に関する記事)
- 第2巻第3号 (1909/M42年1月29日-30日に行われた「松山美以教会音楽会」に関する記事)
- 第2巻第8号 (1909/M42年6月19日に行われた「広島高等師範学校丁未音楽会」に関する記事)
- 第3巻第8号 (1910/M43年6月19日に行われた「広島女学校音楽会」に関する記事)
- 第5巻第4号 (1912/M45年3月2日に行われた「広島高等師範学校丁未音楽会」に関する記事)

● 『藝備日日新聞』

| 発行年月日 | 内容 | 発行年月日 | 内容 |
|-----------|--------------------|----------|-------------------|
| M30/8/29 | 広島學生音楽隊について | S2/10/14 | 奨學基金の募金音楽会 |
| M30/9/4 | 広島學生音楽隊について | S2/11/5 | 奨學基金の募金音楽会 |
| M41/7/7 | ピアノ演奏会 | S2/11/13 | 奨學基金の募金音楽会 |
| M43/6/17 | 音楽会 | S3/2/12 | 音楽会 |
| M43/6/19 | 音楽会 | S3/2/18 | ロシア人声楽団の演奏会 |
| T4/2/16 | 音楽大会 (日割場所について) | S3/7/16 | FK 番組への出演 |
| T4/3/19 | 音楽演奏会 (西洋音楽会場について) | S3/12/24 | FK 番組への出演 |
| T4/4/16 | 音楽会 | S4/12/25 | FK 番組への出演 |
| T4/4/25 | 音楽会 | S6/2/20 | 音楽演奏会 |
| T4/11/28 | 音楽会 | S6/6/12 | 学芸会演奏会 |
| T5/2/1 | 音楽会 | S7/1/1 | ヴァイオリン独奏演奏会 |
| T6/1/11 | 最近の音楽界について (廣女) | S7/2/1 | 近県女子學生音楽会 丁未音楽会主催 |
| T6/1/28 | 音楽会 | S7/2/9 | 學生演奏会 |
| T6/2/5 | 音楽会 | S7/11/13 | 広島市内小學校 総合音楽会 |
| T10/6/30 | 音楽会 | S7/11/13 | 音楽会 |
| T10/7/2 | 音楽会 | S7/11/19 | 教師演奏会 |
| T10/7/3 | 音楽堂の建設について | S7/12/24 | FK 番組への出演 |
| T11/2/12 | 音楽大会 | S8/1/20 | ピアノ演奏会 |
| T12/2/16 | 音楽会 | S8/2/11 | 音楽会 |
| T13/12/12 | 音楽会 | S8/6/18 | 学芸会演奏会 |
| T14/1/25 | 樂壇の花形 (一) 人物紹介 | S9/2/3 | 学芸会演奏会 |
| T14/1/28 | 樂壇の花形 (二) 人物紹介 | S9/2/7 | 音楽会 |
| T14/1/29 | 樂壇の花形 (四) 人物紹介 | S10/2/12 | 奉祝音楽会 |
| T14/1/29 | 来日した伊国音楽家の演奏会 | S11/2/25 | 学芸会演奏会 |
| T14/1/30 | 樂壇の花形 (五) 人物紹介 | S11/7/19 | 教会音楽講習会 |
| T14/2/11 | 樂壇の花形 (七) 人物紹介 | S12/1/29 | 関西女子學生音楽大会 |
| T14/2/11 | 音楽会 | S12/2/1 | 音楽会 |
| T14/2/12 | 音楽会 | S12/2/9 | 建国祝賀音楽会 |
| T14/9/17 | 音楽界について (廣女) | S13/9/24 | FK 番組への出演 |
| T15/6/20 | 管弦樂團を組織 | S13/11/1 | 勇士慰問学芸会 |
| S2/1/1 | 人物紹介 | S13/11/5 | 演奏会 |

³ 『藝備日日新聞』に関しては、広島女学院歴史資料館のご協力のもと、1897/M30年から1938/S13年までに書かれた記事を検討することができた。

『藝備日日新聞』の記事を学校別に分類したところ、広島女学校に関する記事が43記事、戦前の広島女学院に関する記事が19記事あり、合計62の記事が書かれていることが分かった。これらの記事を以下の表では演奏会の種類別に分類した。

| 演奏会の種類 | 広島女学校 | 広島女学院 |
|------------------------------------|-------|-------|
| 単独での演奏会（教師・生徒による演奏会） | 27 | 14 |
| 他校などと合同の演奏会（「広島高等師範学校丁未音楽会」への参加など） | 1 | 2 |
| 招待演奏家による演奏会 | 2 | 0 |
| FK放送への参加 | 3 | 2 |
| 人物に焦点（教師） | 6 | 0 |
| その他 | 4 | 1 |

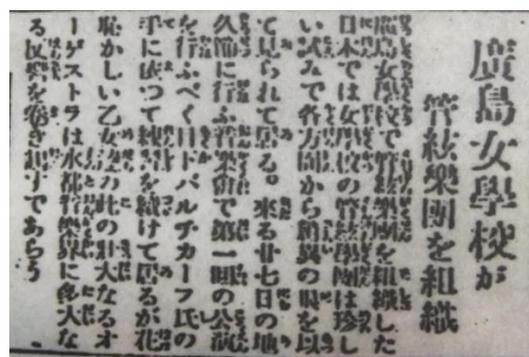
これら『音楽界』と『芸備日日新聞』の記事から読み取れることは、明治期は、広島女学院が単独で行った演奏会が最も多いものの、その他に「広島高等師範学校丁未音楽会」への参加など、学外での演奏活動も行われていたということである。また、明治期にできたスクール・オーケストラが発展し、1926/T15年には「広島女学校管弦楽団」が組織された他（【写真①】・【写真②】を参照のこと）⁴、この時期は、FK放送への参加も盛んであった様子がうかがえる。昭和期は、従来の定期演奏会の他、同窓会主催の音楽会などが行われており、三浦環などの有名演奏家を招いたり、戦争の色が強くなり始めると、慰問演奏会や戦争に関連のある演奏会も催されていたようである。

このように「広島女学院」は自身の学校内における演奏会の他に、高等師範学校などの他校と連携したり、FK放送のようなメディアと繋がることによって、広島市民への洋楽普及に尽力していたと考えられるであろう。

【写真①】 「広島女学校管弦楽団」
（広島女学院歴史資料館 所蔵）



【写真②】 『藝備日日新聞』の記事



3-2 「広島流川教会」における音楽活動

続いて、「広島流川教会」の音楽活動について『日本メソヂスト広島中央教会五十年略史』及び『写真による日本基督教団広島流川教会80年の歩み』を参考にしながら検討してみたい。教会でも、明治期にはすでに洋楽器が導入されており、日露戦争の際には出征兵や傷病兵のための慰問音楽会を開

⁴ なお、このもととなった明治期のスクール・オーケストラは広島初の管弦楽団であったと考えられる。

いていた。また、以下の1897/M30年頃に撮られた教会員の集合写真にも管楽器や打楽器など洋楽器が映っていることがうかがえる（【写真③】を参照のこと）。続く大正期には、音楽礼拝が頻繁に行われていたほか、昭和期には教会の階上にあつたFK放送主催の演奏会を行っていたという記述も垣間見られた。これらのことを総合的に考えるならば、「広島流川教会」も「広島女学院」と同様に、恐らく女学院の宣教師からの影響と思われるが、明治期より洋楽器を用いた演奏会をするなど、洋楽普及に尽力すると同時に、長きに亘って洋楽を通じた宗教活動を展開してきたと考えられるであろう。

【写真③】 日本メソヂスト広島中央教会時代の教会員集合写真
（『写真による日本基督教団広島流川教会 80年の歩み』所収）



このように「広島女学院」と「広島流川教会」は、広島の洋楽受容における最初期から関わり続けていたということがうかがえる。「広島女学院」の初代校長で「広島流川教会」の理事でもあり、また、広島における最初のピアノをアメリカから持ってきたゲーンズ女史は、1910/M43年の『年報』の中で、キリスト教活動や人間教育のどの部門でも音楽の助けが必要であり、広島で設備の充分整った音楽部をもてば公立学校に音楽教師を送り出すことなどの大きな助けともなり、さらに広島に音楽が広く伝わっていくことの一助となり得ると述べている。このことから分かる通り、これらの機関では、全人的な教育や宗教活動のために洋楽は絶対不可欠なものであり、高等師範学校など他校や放送メディアとも連携し、広く音楽が広島の土壌に根付き発展していくことを強く願って活動を続けてきたのだと思われる。

4. 今後の課題

今後は、まだ着手できていない新聞記事や要人の手記、そして教会の週報などといった一次資料の検討、及びそこで演奏されていた曲目など具体的な内容の考察を行い、「広島女学院」と「広島流川教会」との影響関係を探ると共に、他機関と行っていた連携についても視野に入れ、これら「広島女学院」や「広島流川教会」が担ってきた役割について、広島の洋楽普及全体像における位置づけを行っていきたい。

【引用・主要参考文献】

- 大空社編 1995 『音楽界・復刻版』 東京：大空社（全 26 巻）
- 藝備日日新聞社編（明治 30 年～昭和 13 年） 『芸備日日新聞』 広島：芸備日日新聞社
- 坂本麻実子 1998 「明治末期の地方ピアノ界とプロテスタント系女学校—仙台と広島の事例から—」
『桐朋学園大学研究紀要』第 24 集：27-44.
- 津上智実 2010 「婦人宣教師シャーロット・デフォレストの音楽活動—オペラ歌手柴田（三浦）環
との共演—」『神戸女学院大学論集』第 57 巻第 1 号：163-176.
- 津上智実 2010 「神戸女学院音楽部レッスン帳（1907—1923）の資料的価値とその内実」『神戸学
院大学論集』第 57 巻第 2 号：41-153.
- 手代木俊一 2006 「オルチン書簡をとおして見た神戸女学院と音楽—創設期から音楽科設置（1906）
頃まで—」『学院史料』第 21 巻：17-33.
- 土肥昭夫 1980 『日本プロテスタント・キリスト教史』 東京：新教出版社
- 中村洪介 2003 『近代日本洋楽史序説』 東京：東京書籍
- 日本メソヂスト広島中央教会編 1936 『日本メソヂスト広島中央教会五十年略史』
- 日本基督教団広島流川教会編 1967 『写真による日本基督教団広島流川教会 80 年の歩み』
- 広島女学院同窓会編 1986 『広島女学院同窓会百年誌 広島女学院と共に百年』
- 広島女学院百十年史編集委員会編 1997 『広島女学院百十年史』
- 広島女学院百年史編集委員会編 1991 『広島女学院百年史』
- 安田寛 1998 「アメリカン・ボード日本ミッション音楽教育史」『キリスト教社会問題研究』
第 46 号：25-73.
- 安田寛 1998 「京都と神戸ステーションの音楽教育史」『キリスト教社会問題研究』第 47 号：38-80.
- 安田寛 2002 「神戸女学院の音楽教育史」『キリスト教社会問題研究』第 51 号：189-212.
- 安田寛・北原かな子 1999 「弘前女学校の音楽教育」『弘前大学教育学部紀要』第 82 号：87-95.
- 安田寛・北原かな子 1998 「弘前と遺愛女学校の音楽教育」『弘前大学教育学部紀要』第 80 号：37-47.

光平 有希（みつひら ゆうき：総合研究大学院大学文化科学研究科国際日本研究専攻 博士後期課
程在籍 / mitsuhiroyuuki65@yahoo.co.jp）